拠点運営での取組報告

〈事業報告〉

なごみん　8/6～8/8　なごみん横丁（第16回）

●総来場者数　900名

●協働先：光ヶ丘女子高校、岡崎商業高校、岡崎工科学校、岡崎東高校、岩津高校、㈱ナンブ、尾西食品㈱、さくらくらぶ（順不同）

●ほぼゼロの状態から子どもたちがまちを作っていくことに重点をおくことで、テーマパークに遊びにくるのではなく、自分たちでまちを作っていく体験をしてもらうことができました。また、本事業は多くの学生の方にボランティアとして参加いただきました。説明会の際には、ボランティアの心得についてもお話をしたことで、本事業をきっかけにボランティアマインドの高い学生の育成につなげることができました。

むらさきかん　8/24　活躍人！交流会～食品ロス対策～

●総来場者数　34名

●協働先：認定NPO法人　葵風、愛知学泉短期大学食物栄養学科
山下食品株式会社、生活協同組合コープあいち

●愛知学泉短期大学食物栄養学科の熊崎さん、認定NPO法人葵風の月東さんによる事例紹介を通じて、日本の食品ロスの現状や、社会に与える影響を知ることで、食品ロスを発端とする社会課題を自分事にして捉えてもらうことができました。

●市民活動団体をはじめ、子ども食堂、学校、事業者など多様な主体からの参加があり、グループワークでは、それぞれの立場にたった意見交換ができました。終了後のアンケートでは、多くの参加者から他の団体と協働したいとの回答が多く、市民活動団体等の連携の促進に繋がったことが伺えました。

まち育て推進チーム　Pick UP！

高齢聴覚障がい者向け出前講座

9月18日に南部市民センターにて、聴覚に障がいをお持ちの方を対象とした、にじみかわ会、高齢聴覚障害者の会主催の防災出前講座において、りた・小早川（防災士）が講師を務めました。「命を守るための基本的な知識をわかりやすく説明してもらえないか」という市民活動相談から始まった企画で、実施内容の提案・検討から実施しました。

講座では、防災の基本的な知識を具体的に自分ごととして考えられるよう、〇×クイズを混じえながら学びを深めました。

また、質疑応答の際には、参加者の方から自分のアイデアや踏み込んだ疑問などの積極的な発言がみられ、普段の生活に合わせた防災意識を高めるきっかけをつくる場を提供することができました。

お問合せ		よりなん	59－3600	むらさきかん	66－3066	市民活動センター	23－3114
なごみん	66－8251	やはぎかん	33－3665	悠紀の里	57－5050	まち育て推進チーム	23－2888

まちのミカタ
Litaracy
2024.11　vol.130

発行・編集
特定非営利活動法人
岡崎まち育てセンター・りた
〒444-0031　愛知県岡崎市梅園町3丁目6-6
TEL（0564）23-2888／FAX（0564）23-2898
http://www.okazaki-lita.com/
https://www.facebook.com/okazaki.lita/

配布
岡崎市図書館交流プラザ・Libra／岡崎市内の地域交流センター
会員宛へ郵送　等　※会員登録をご希望の方は左記までご連絡ください。

配布協力
岡崎市役所各支所／岡崎市各市民センター／シビックセンター／FMおかざき／杉くんの駄菓子屋／松應寺／cafeくらがり／

まちのミカタ
Litaracy
ーりたらしいー
130
2024年11月

特集

松應寺横丁の軌跡　その２　地域包括ケア編

「地域の困った」を解決し続ける
ー松本町包括ケア会議の１０年ー

りたが「高齢者に優しいまちづくり」に初めて取り組んだのが松本町（広幡学区）です。この取組に着手したのが2013年であり、今年2024年は活動開始から10余年が経過しました。

前号では、2011年から松應寺横丁の空き家対策事業に取り組んできたことを紹介しました。当時から松本町の高齢化率の高さ、独居老人の生活に関する課題は、りたとしても把握、認識していましたが、具体的な活動をおこすには人手が十分ではありませんでした。しかし、前号で紹介した「にぎわい市」「なかみせ亭」などの取組を通じて、徐々に地域内外の出店者や協力者が現れ、松本町の地域活力が高まっていったのです。

高齢者や独居老人の生活支援の取組を進めるにあたり、そうした新たな担い手の存在が重要なカギとなりました。今号では、松應寺横丁の高齢者支援の側面に焦点を当て、現在までの活動の流れを紹介します。

特集　松應寺横丁を支える松本町包括ケア会議

●松本町包括ケア会議とは？

高齢者支援の体制について、町総代（自治会長）や地元の市議に相談し、2013年に「松本町包括ケア会議（以下、松本ケア会議）」を発足しました。当初の構成員は、総代、民生委員、氏子総代、老人会会長、簗瀬市議、ひな包括支援センター、およびりたでした。その後、活動が展開する中で、会員制お弁当屋（一松／椿寮）のオーナー、コミュニティカフェ「なかみせ亭」のオーナー、おしゃべりサロン「じゅげむ」のオーナーらにも参加いただくようになり、現在に至っています（発足当時は毎月開催、ここ数年は隔月開催）。

松本ケア会議の取組概要を下記に示します。ここで実現してきた（インフォーマルな／行政などの制度にのらない民間主体の）社会サービスは「①独居老人向けの食事サービス（および安否確認）」「②独居老人向けの会食機会（年4回、今は年2回）」「③独居老人の緊急連絡先等の把握」「④食材、食事の場の充実」と、多岐にわたります。また、会議での主要議題の一つが「認知症高齢者に関連するトラブルへの対応」であることも特徴です。以下、この10年間の活動を伴走支援してきた筆者（三矢）の立場から、この活動が長期にわたって比較的上手く展開出来ている要因と思われることについて紹介します。

2013　松本ケア会議　発足
2014　会員制お弁当屋さん「一松」開業（図1）
　　※2019　椿寮さんが継承後、椿寮さんの移転とあわせ休止
2015　救急医療情報キットの企画開発と実装（学区単位での展開）
2016　おしゃべりサロン「じゅげむ」オープン（週4日開館している居場所）
2016　会食パーティ事業の開始（図2）（年4回→年2回）
2018　住民ニーズ調査（2011年から2回目）
2020　とくし丸（移動スーパー）の誘致（図3）

▲図1　独居老人向け会員制お弁当屋「一松」の様子

▲図2　会食パーティ「じゅげむ」の様子

▲図3　移動スーパー「とくし丸」

●松本ケア会議が長期的に上手く展開できている要因とは？

一つは、「雑談の中に活動のヒントがある」です。松本ケア会議では、会議が始まる前に、町総代が最近のまちの話題（お祭りが近い、認知症の〇〇さんに関するトラブル他）を雑談的に話し出すことが常となっています。例えば「最近、立て続けに、独居老人が家の中で倒れて、救急車を呼んだ際に同乗することとなり、本人の連絡先や日頃飲んでいる薬を聞かれたけど、知らなくて困っちゃうんだよね」といった愚痴。これを手掛かりに検討や調査が始まり、日頃飲んでいる薬や緊急時の連絡先を書き出し、その紙面を入れたケースを冷蔵庫に入れ、この状況を救急隊に伝わるように、玄関裏側に掲示を出す「救急医療情報キット」の開発が実現しました。ちなみにこのキットは、町内で開発し、運用は学区単位に広がりました。

もう一つは「おせっかいおばさんを取り巻くコミュニティ」です。コミュニティカフェ「なかみせ亭」を切り盛りしてくれているキーパーソンの一人がSさんという女性（おせっかいおばさん）です。彼女は、服が汚れていたり、場合によっては大声を出してしまうような認知症高齢者が来店した際も、「困っちゃうのよねー」と笑い飛ばしつつ、言葉巧みに服を着替えるように促したり、あるいはデイサービスセンター利用へとつなぎ、数か月をかけて、おだやかなコミュニケーションがとれるところにまで関係を変えていきます。ケア会議では、こうした現場での苦労を労い、時には笑い話として分かち合い、時には地域包括支援センター職員から助言をもらい、あるいは包括職員による直接介入にもつないでいきます。

10年を俯瞰して思うのは、「地域が臨機応変に、楽しみながら、愚痴をこぼしあいながら取り組む領域」が土台としてあり、一部側面的に「りたが、まちづくりの助言者、伴走支援者として計画的に支援できる領域」により活動開発を促進し、「地域包括支援センターが扱う、社会制度として担保できる領域」との連携や協働にも目くばせをするような場として、松本ケア会議が運用されてきたことが良かったと思う。りたは、こうした地域での会議運営支援を、引き続き継続展開していきます。

まちの今を切り取る！
まちづくりトピックス
-local topics-

岡崎公園アイデアソン　レポート

岡崎公園は、岡崎市のシンボルである岡崎城がありますが、若者があまり訪れていないという課題がありました。今年12月26日の徳川家康公の誕生日に、岡崎公園は「岡崎城公園」へ名称を変更されます。岡崎市は、これを機に、どうしたら若者が岡崎公園に行きたくなるか、岡崎公園に愛着が持てるかを、若者自身に提案してもらう「岡崎公園アイデアソン」というワークショップを9月に開催。りたは、その企画・運営に携わりました。

ワークショップでは、9名の参加者が実際に岡崎公園を訪れ、参加者の関心に応じて3つのチームに分かれて提案を練りました。それぞれのチームは「体験＆イベント」「居場所作り」「魅力発信」のテーマに取り組み、岡崎城公園を多くの人に楽しんでもらうための工夫を発表しました。

「体験＆イベント」チームは、夜の岡崎公園を活用したイベントや家康館の体験ブースを写真映えスポットとして活用するアイデアを提案しました。「居場所作り」チームは、カフェに足湯を併設し、内装に岡崎らしさを取り入れるといったアイデアや、子ども食堂の開催など幅広い世代が集える場所づくりを提案しました。「魅力発信」チームは、歴史的な文化財を活用した新しい見せ方や、SNSで市内のインフルエンサーとコラボすることで、岡崎城公園の魅力を広める提案をしました。

今回の提案が、参加した若者にとっても岡崎市にとっても有益なものとなる可能性を感じました。

▲岡崎公園の特徴や魅力を探るフィールドワーク

▲フィールドワークで得られた気づきやアイディアを元に、提案の軸となるテーマを検討

りた's Eye

りたは若者と行政の橋渡し役として重要な役割を果たしました。大学生のアイデアを市役所や市長に伝えることで、地域課題解決に向けた市民参加型の仕組みが促進され、また、地域活性化においても我々りたは若者の柔軟な発想と行政の現実的な課題を結びつける役割を担いました。アイデアの具体化や調整においてもサポートを行いました。

りた職員の思いを伝える！
コラム　~lita column~

ボランティアを考える。

「私たちは、“タダで働いてくれる都合のいい労働者”じゃない」
「ボランティアとは、同じ目標に向かって、力を合わせて共に活動するものなんじゃないですか」
———あるボランティア団体の方に言われました。

ボランティアをしたい人、ボランティアを求めている団体のマッチングをしている私たちにとって、衝撃的な言葉でした。聞くと、「ボランティアに出向くと、指示出しだけされ、時間を指定され、あとは関わりなし」ということが続いたと。全部が全部、そういったケースではないにしろ、ボランティアの方に大変申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。ボランティアには受け入れる側の【心得え】【マナー】があります。ボランティアをする人、受け入れる側は対等です。

密なコミュニケーションを取る。ボランティアをしたい人、求めている団体が互いを理解し合う。目的を共有する。感謝の気持ちを持つ—どれもボランティアの基本です。ボランティア依頼を受ける時、ボランティアを紹介する時、双方にボランティアの本質を伝えることがいかに重要であるかを痛感し、自省しました。

ボランティアは単なる働き手ではない。当たり前過ぎるほど当たり前のことだけど…きちんとわかってもらおう。ていねいに伝えていこう。ていねいに。ていねいに。

鈴木千鶴（市民活動センターセンター長）
Libra開館（2008.11）と共に市民活動センターに勤めて早16年。受験勉強でLibraに通った長男も結婚し、今や2児の父親に。「歳とるはずだわ…」進む老眼と体力低下に怯えながら（？）それでも頑張る今日この頃です。